



ユーフラテス河とシリアの人びと、2001年

自然に挑み、世界を変える 土器誕生が物語る人類史の転換点

建築博物教室 第18回 公開ギャラリーセミナー

うつわのアーキテクチャ

小高 敬寛(東京大学総合研究博物館 特任研究員/近東考古学)

日時：2019年3月30日(土) 13:30~15:00

会場：東京大学総合研究博物館小石川分館2階「空間標本」展示室

入場：無料(事前申込不要)

うつわのアーキテクチャ

小高 敬寛



(左上)テル・セクル・アル＝アヘイマル遺跡(シリア)、2001年(右上)テル・エル＝ケルク遺跡(シリア)の調査風景、2007年、(左下)テル・サラサート遺跡(イラク)出土土器、約8300年前(東京大学総合研究博物館蔵)(右下)テル・セクル・アル＝アヘイマル遺跡(シリア)出土土器、約8900～8500年前(東京大学総合研究博物館蔵)

私たちが暮らす今日の社会は、700万年に及ぶともいわれるヒトの歩みによって形づくられてきました。その道の途上には、人類の行く末を定めたというべき、いくつかの歴史的転換点が存在します。およそ1万年前、氷河期の終わりに直面した人びとが、変わりゆく環境に適応して生き残りを図るべくとった行動も、結果的にその一つをもたらしたといえるでしょう。意外に思われるかもしれませんが、遺跡から出土する土器のかけらさえ、そのことを確かに伝えてくれます。最古の土器のアーキテクチャが映し出す先人たちの生存戦略とイノベーション、そして現代社会が受け継ぐそれらの遺産について、文明発祥の地として知られる西アジアを舞台にお話しします。



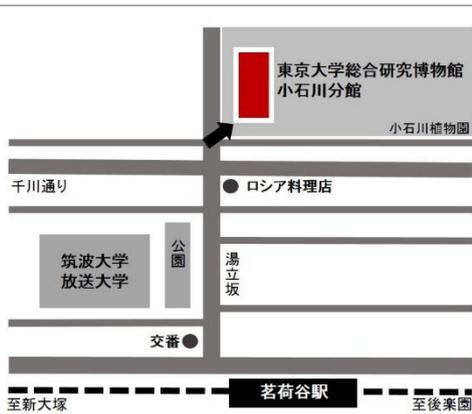
小高 敬寛 (おだか たかひろ)

早稲田大学大学院文学研究科史学(考古学)専攻修了、博士(文学)。早稲田大学高等研究所助教、東京大学総合研究博物館特任助教などを経て現職。1996年よりシリア、トルコ、アゼルバイジャン、ヨルダン、イランなど西アジア諸国の遺跡調査に従事。現在はイラク・クルディスタン地域を主たるフィールドとして、農耕牧畜社会の成立から都市文明社会に至るプロセスの考古学的な解明に取り組んでいる。

著作に『西アジア考古学講義ノート』(共編著、日本西アジア考古学会、2013年)、『イスラームと文化財』(共著、新泉社、2015年)、『やきもの つくる・うごく・つかう』(共著、近代文藝社、2018年)など。



テル・セクル・アル＝アヘイマル遺跡(シリア)の朝焼け、2001年



東京大学総合研究博物館小石川分館

〒112-0001 東京都文京区白山3-7-1
Tel. 03-5777-8600(ハローダイヤル)

開館時間: 10:00-16:30 (入館 16:00 まで)

入館料: 無料

休館日: 月・火・水曜日

(いずれも祝日の場合は開館)、年末年始、その他博物館が定める日

アクセス: 地下鉄丸の内線茗荷谷駅より徒歩8分

<http://www.um.utokyo.ac.jp/architectonica/index.html>

建築博物教室とは?

「アーキテクチャ」をテーマにさまざまな分野の研究者が講演を行い、関連した標本を「アーキテクトニカ・コレクション」として展示していくシリーズイベントです。

建築ミュージアム / アーキテクトニカ

KOISHIKAWA Annex.

UMUT

東京大学総合研究博物館小石川分館